

福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集



SUKI ZAKI

鋤崎古墳

1981~83年調査概報



1984

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する福岡市周辺地域は、古来より大陸・半島との交渉の門戸として、数多くの遺跡や遺物にそうした交流の跡をみいだすことができます。本書に収めた鍋崎古墳も、4～5世紀における朝鮮半島と北部九州の交渉史をたどるうえで重要な位置をしめる一例です。

鍋崎古墳は、西区今宿青木にある全長62mあまりの前方後円墳です。墳丘の遺存がよく家形埴輪などが採集されたこともあって、研究者のあいだで注目されていましたが、これまで調査のメスが加えられていませんでした。

福岡市教育委員会は、重要遺跡確認調査の一環として本古墳をとりあげ、1981年度から3ヶ年にわたりて調査を行いました。その結果、墳丘の形態や構造に関する知見とともにわが国で最古期の横穴式石室を検出することができました。今年度は調査の最終年度ですが、出土遺物の整理作業が終了していないこともあります。連報の意を含めて本概報を刊行します。

本書が、古代文化研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財について一層のご理解とご協力を願うものであります。

なむ、調査にあたり貴重なご助言を授けられた諸先生、ご協力・ご援助をいただいた関係各位、ならびに格別のご配慮を賜わりました土地所有者のかたがたに心から感謝いたします。

昭和59年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

目 次

| | | |
|-----|----------------|----|
| I | はじめに | 1 |
| II | 古墳の位置と周辺の前方後円墳 | 2 |
| III | 墳丘 | 4 |
| IV | 埴輪と土師器 | 8 |
| V | 埋葬施設 | 10 |
| VI | おわりに | 17 |

例 言

- 本書は、福岡市教育委員会が主体となり1981年度から83年度に調査を実施した鍋崎古墳の記録概報である。
- 本書の執筆は、V-2～5号埋葬施設を杉山富雄が、他は柳沢一男が行った。
- 出土遺物の復原・実測には川村浩司、牟田慎郎、宮井善助氏(九州大学考古学研究室)の協力をえた。
- 遺構・遺物写真の撮影は主に柳沢が行ったが、横穴式石室の一部は九州歴史資料館石丸洋氏に撮影をお願いした。
- 本書に使用する方位は磁針である。
- 本書の編集は柳沢が行った。

●表紙写真は石丸洋氏の撮影による

I はじめに

調査にいたる経過

飼崎古墳は、福岡市西区今宿青木字飼崎424-5・6に所在する全長62mあまりの前方後円墳である。丘陵端に後円部を配し、前方部端面を丘尾切斷によってつくりだす。クビレ部が細くしまり前方部先端があまり開かない墳形や、細くて突出度の高い凸帯をもつ円筒埴輪が採集されることなどから、古式の前方後円墳として注目されてきた。しかし、これまで墳丘測量はおろか、何らのデーターも作成されておらず、古墳の詳細はほとんど知られていなかった。

さて福岡市教育委員会は、市域内に存する埋蔵文化財のなかで将来にわたって保存の要があるとみとめられる遺跡について、基礎資料の収集・作成をすすめている。飼崎古墳もその一つとして以前から計画を重ねてきたが、ようやく1981年度から3年間にわたって調査を行うことができた。実施にあたっては、重要遺跡確認調査として国庫の補助を受けた。

調査の結果は、本書に収めた概要によってその一端をしめしたが、墳丘ならびに埋葬施設の構造に多くの新知見を加えた。とくに後円部中央に營まれた横穴式石室は、調査時すでに天井部が陥没していたとはいえ、わが列島における横穴式石室導入期の姿相を理解するうえで貴重な事例といえるであろう。

調査組織

| | | | |
|------|--|-------------|--|
| 調査主体 | 福岡市教育委員会 | | |
| 調査総括 | 文化課長 | 甲能 貞行 (前任) | |
| | | 生田 征生 | |
| | 埋蔵文化財第2係長 | 柳田 純孝 (前任) | |
| | | 折尾 学 | |
| 調査庶務 | 埋蔵文化財第1係 | 古藤 国雄・岡嶋 洋一 | |
| 調査担当 | 埋蔵文化財第2係 | 柳沢 一男・杉山 富雄 | |
| 調査補助 | 田崎博之、半田慎郎、宮井善朗、古野徳久、土井基司 (九州大学考古学研究室)、野村俊之 (別府大学生)、赤司善彦 (明治大学生)、南秀雄 (京都大学大学院生) | | |

なお調査にあたって、福岡県教育委員会、九州歴史資料館から多々ご配慮を受けた。また調査中には、森貞次郎、小林行雄、岡崎敬、横山浩一、小田富士雄、西谷正の諸先生から貴重な指導・助言を受け、九州大学考古学研究室の全面的な協力をたまわった。さらに墓石の写真測量には、奈良国立文化財研究所、埋蔵文化財センターの協力をえた。飼崎古墳所在地の地権者は松興産株式会社 (是松上次代表)、仁田隆三氏は調査の実施に心よく許可いただいた。記して謝意を表したい。

年次別調査項目

- 1年度 (1981) 墳丘、周辺地形測量 (業者委託)
- 2年度 (1982) 墳丘測量、後円部トレンチ (N、E1、W1)、東クビレ部 (E2区) の発掘調査。
- 3年度 (1983) 西クビレ部 (W2区)、前方部トレンチ (E3、E4、W3、W4、S、B、C T)、1~5号埋葬施設の発掘調査ならびに埋め戻し。

II 古墳の位置と周辺の前方後円墳

鶴崎古墳の所在する西区今宿は、福岡県北西端の玄界灘に面する糸島平野東縁部にあたり古墳の位置する。この一帯は、博多湾に沿って東西にのびる砂丘と背後にせまるる高祖山(416m)とのあいだに、東西3km、南北1kmあまりの低平な小平野をなす。鶴崎古墳は、隣接の早良平野とを画する長垂~叶岳山塊(341m)の西麓、今宿平野でいえばその東端丘陵上に築造されている。丘陵上からは平野部のほぼ全域を眺望することができる。ちなみに古墳の位置は、1/5万地形図「福岡」の上端から21.7cm、左端から6.8cmの地点である。

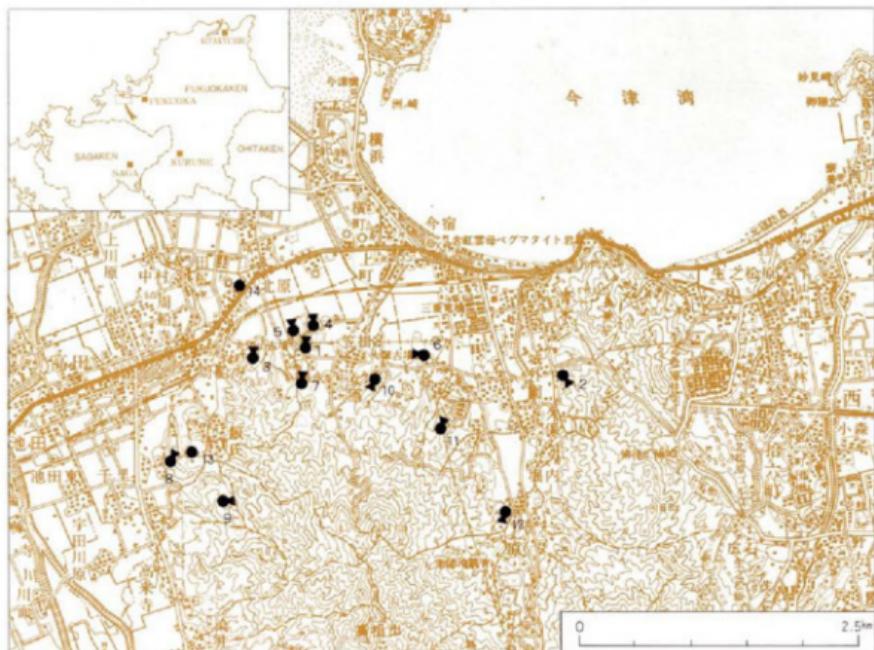
糸島地方の前方後円墳糸島地方には現在41基の前方後円墳が知られている。令制でいえば筑前国治上・志摩の二郡に属するが、筑前国域での前方後円墳が約130基であり、その3割強をしめる。一地域としては濃密な集中度である。分布状況は、河川流域を単位とする小平野周辺にまとまりがみられる。おおまかにくくれば、I 長野川流域を中心とした西群(11基)、2 富山川、端梅寺川城の中央群(14基)、且今宿平野部の東群(12基)、IV 志摩半島の北群(4基)の四群にわかつられる。古墳規模は総じて小形である。全長80mをうわまわる古墳は、一貴山銚子塚(西群)、端山・菜山(中央群)、丸隈山(東群)、間(北群)の5基をかぞえるにすぎない。

各群とも前期から古墳の造営がみとめられるが、もっとも遅るのは北群の倒道具山古墳であろう。全長60mあまり、クビレ部が細く前方部が撥形に聞く。西群では糸島地方最大(全長103m)で、8面の彷彿三角縁神獸鏡を副葬した一貴山銚子塚、中央群では出土した土師器から端山古墳が最古である。東群の場合、三角縁二神二獸鏡、環頭大刀などを出土した若八幡宮古墳があげられるが、北に接する山ノ鼻1号墳が先出の可能性がある。

さて、鶴崎古墳を含む東群(今宿古墳群)は、12基の前方後円墳と30mクラスの大形円墳3基が、高祖山麓丘陵上あるいは下部段丘面上に東西に列するように分布する。また丘陵部には約320基の小円墳からなる群集墳が密集する地域もある。群集墳のなかには、竪穴系横口式石室を埋葬施設とし、5世紀後半代に遡る一群もみとめられる。

首長墓の系譜前方後円墳12基の規模をみると三種に大別される。一つは50m前後以上、いま一つは30m前後の小形墳である。後者は4基ある。いずれも群集墳の營まれた丘陵上にあり、群の盟主的な位置をしめる。すべて横穴式石室墳であり、6世紀中葉以降の造営と考えられる。これにたいして、前者に属する8基の前方後円墳は、平野部に突出した丘陵上もしくは段丘面上に位置する。また各古墳が、ほぼ四半世紀前後の差異をもって造営されており、これらが今宿平野を本貫とした首長層の累代造営にかかる首長墓群ととらえることができる。こうしたなかで鶴崎古墳は、5世紀前半の丸隈山古墳に先行する。石室構造・副葬品とともに、その事実を例証している。また4世紀後半に位置づけられる若八幡宮古墳に後出することも明かであり、この二基のあいだに造営された首長墓と推測される。

老司・鶴崎古墳をはじめとする初期横穴式石室が、玄界灘に面した福岡・糸島平野にまず成立した事実は、この地域が朝鮮半島と一衣帶水という位置にあるとしてもなお、地理的要因のみで新しい墓制の導入を理解することは困難である。新たな墓制を受け入れる素地と、前代からの彼地との通交、さらに4世紀後半代における百濟と北部九州首長層をめぐる政治状況のなかで横穴式石室の導入が可能になったと想定される。糸島・福岡平野の特異性については今後さらに検討すべき課題といえよう。



▲今宿平野前方後円墳の分布 (1/5万)

▼今宿平野主要古墳一覧

| No. | 古墳名 | 所在地 | 立地 | 全長(m) | 葺石 | 埴輪 | 埋葬施設 | 出土遺物・その他 | 文献 |
|-----|-----------|---------|-----|--------|----|----|--------|---|----|
| 1 | 若八幡宮 | 福岡市西区徳永 | 丘陵端 | (48) | ○ | | 木棺直葬 | 三角縁神獣鏡、碧玉製管玉、ガラス小玉、環頭大刀、鏡、劍、鍔、刀子、堅細板革織短甲、鋼製有孔円板、土師器 | 1 |
| 2 | 鶴崎 | ・ 今宿青木 | 丘陵端 | 62 | ○ | ○ | 横穴式石室 | 鏡6(柳葉2、方54)、銅劍2、勾玉、管玉、ガラス玉、滑石製白玉、椎、素面頭大刀、直刀、劍、鉢形、鍔、戰小刀子、鉤 | 2 |
| 3 | 丸隈山 | ・ 周船寺 | 丘陵端 | (79.5) | ○ | ○ | 横穴式石室 | 青銅鏡2、巴形銅鏡、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉、鉄劍、直刀、鐵鏟 | 3 |
| 4 | 山の鼻1号 | ・ 徳永 | 丘陵上 | (48) | ○ | | ? | 埴丘半壇 | |
| 5 | 山の鼻2号 | ・ 徳永 | 段丘上 | (60) | ○ | | ? | 埴丘破壊 | |
| 6 | 今宿大塚 | ・ 今宿 | 段丘上 | 64 | ○ | ○ | 横穴式石室? | 埴輪、須恵器、陶質土器 | 4 |
| 7 | 下谷 | ・ 徳永 | 丘陵上 | ? | | | 横穴式石室? | 埴丘破壊 | |
| 8 | 飯氏二塚(子捨塚) | ・ 飯氏 | 段丘上 | 53 | | | 横穴式石室? | 須恵器、埋葬施設破壊 | |
| 9 | 飯氏B14号 | ・ 飯氏 | 丘陵上 | 24 | | | 横穴式石室 | | |
| 10 | 小松原 | ・ 女原 | 丘陵上 | 24 | | | 横穴式石室? | 埴丘半壇 | |
| 11 | 谷上 | ・ 今宿 | 丘陵上 | 28 | | | 横穴式石室 | | |
| 12 | 本村 | ・ 青木 | 丘陵上 | | | | 横穴式石室 | 埴丘破壊 | |
| 13 | 飯氏(兜塚) | ・ 飯氏 | 段丘上 | 31 | ○ | ○ | 横穴式石室 | (鏡(径5寸)、鏡の金具) | |
| 14 | 山崎 | ・ 周船寺 | 段丘上 | 30 | | | ? | | |

文献 1. 柳田康雄ほか「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』2 福岡県教育委員会1971

2. 本書

3. 三島格・小田富士雄ほか「丸隈山古墳」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集) 福岡市教育委員会1970

4. 柳沢一男「今宿大塚古墳」福岡平野の歴史－緊急発掘された遺跡と遺物 福岡市立歴史資料館1977



墳丘全景
(西から)

III 墳丘

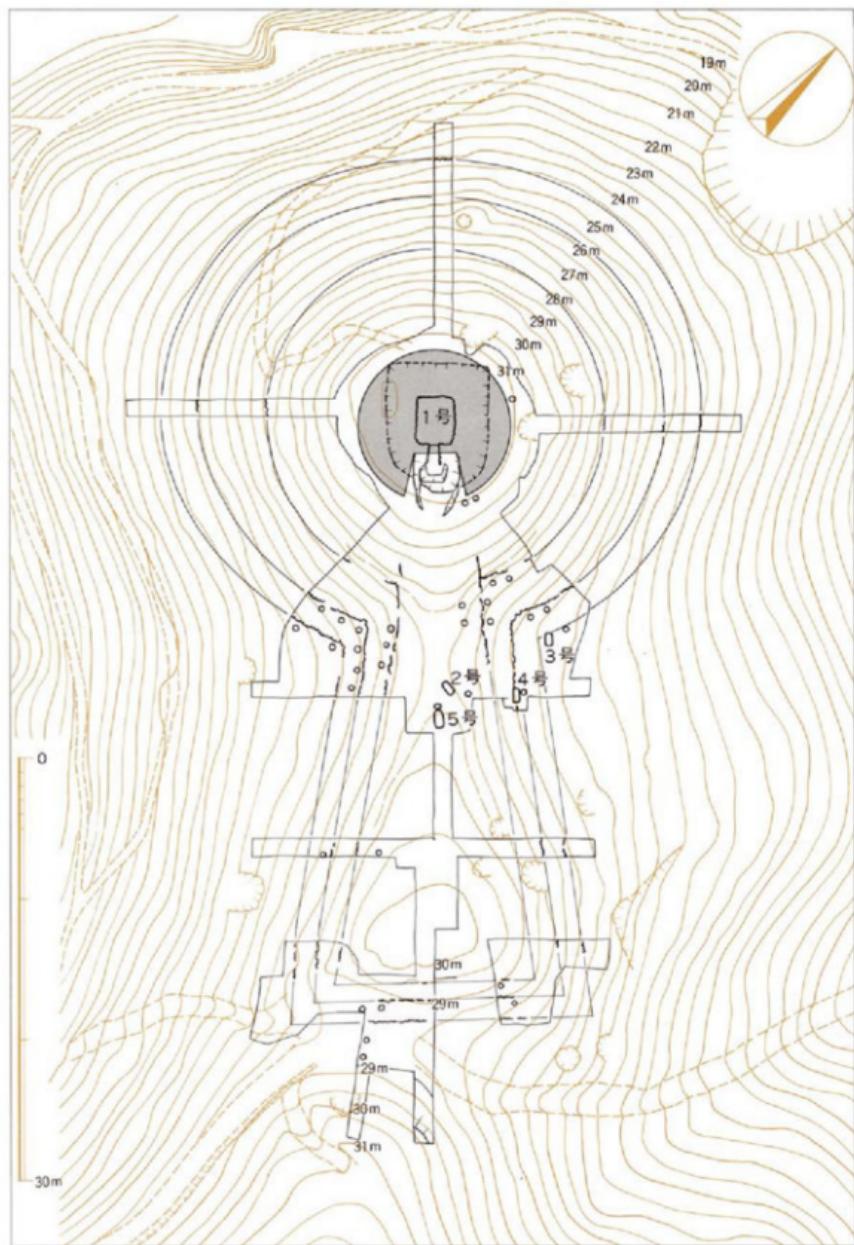
古墳は叶岳から北西にのびる丘陵尾根上に築造され、後円部を尾根端に、前方部を尾根上方に配置する。したがって、尾根上方にあたる前方部前端面は、尾根を横断する切通し状の地山掘削によって整形している。

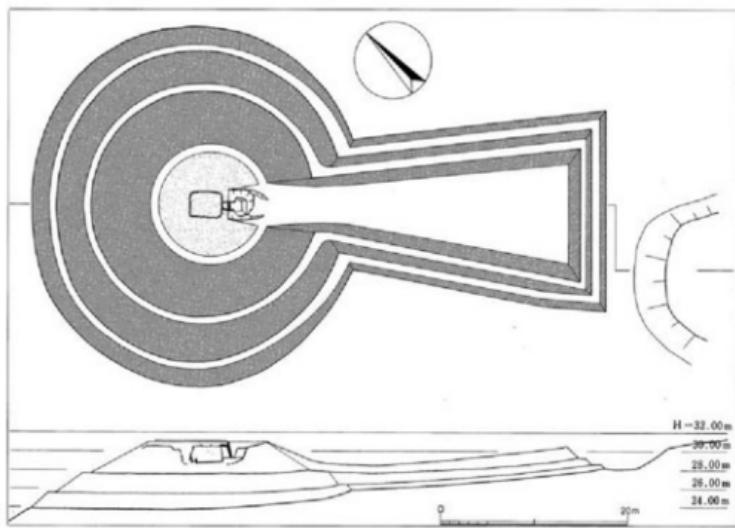
墳丘全体の遺存状況は、前方部隅角線での流出が目立つ程度できわめて良好な部類に入る。しかし墳丘斜面の傾斜がつよく封土の流出、再堆積等のため、調査前に段築の有無は確認しえなかった。また墳丘掘線も、クビレ部と前方部前端線を除いて、その境が不明瞭となっている。測量時の観察では、墳丘は尾根の傾斜に沿って後円部側にしだいに下降する可能性が想定されたが、具体的な確認をうるにいたらなかった。その段階では後円部端の幅を25m前後の等高線付近と推測し、墳丘全長を約58m、後円部径35mあまりと想定するにとどまった。

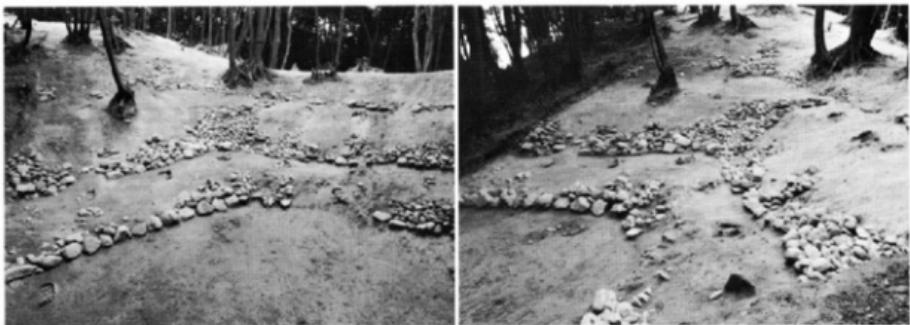
墳丘構造のトレンチは、各必要箇所に設定した。クビレ部と前方部端については、墳丘復原のため広範囲の調査区とした。各トレンチの詳細は本報告に譲り、ここでは墳丘構造についての概要を記すことにしたい。

墳丘の段築は後円・前方部とともに3段である。各段の斜面は、花崗岩小転石からなる葺石をめぐらせる。基部には大形石材を配するが総じて小形である。作業区画をしめすような石の配列はみとめられない。斜面葺石、段テラスの遺存状況は、クビレ部に近いほど良好だが、後円部の急斜面部、前方部隅角では流出したところもある。墳丘封土は、後円部墳頂の60cmあまりの盛土を除いて、すべて地山（花崗岩風化土壤——マサ）削り出しによって形成されている。前方部前端部では、幅11m、深さ2.5mに尾根を切断している。墳丘の地山整形は、各段の斜面、テラスまでにおよぶ。斜面葺石は地山とのあいだに20~30cmの裏込め（土砂）を行なながら積みあげる。

墳丘側面観 調査前に推定されたように、墳丘裾レヴェルは前方部から後円部に向ってゆく下降している。もっとも高い前方部前端中央で標高28.2m、クビレ部（西側）25.9m、後円部端の最低位部で23.8mをはかり、比高差は4.4mに達する。その傾斜角度は一定しておらず、後円・前方部とも中央が低くなった孤状をなす。II・III段のばあい、葺石基石の下部レヴェルはI段と同じく後円部に向って下降するが、後円部では水平に近いレヴェルを保つ。







左西クビレ部(西から)
右西クビレ部(南から)

したがって、裾から頂部までの比高差の少い前方部と大きな後円部では同一の段でも高さ傾斜角が一定していない。その側面観は左図にしめすように、アンバランスな様相をみせる。墳丘規模は下表にしめすとおりである(単位m)。

※()内は推定

墳丘規模

| | 全長 | 後円部径 | クビレ部幅 | 前方部長 | 前方部前端幅 |
|------|--------|-------|-------|------|--------|
| I段 | 62 | 38-36 | 15 | 27 | (22) |
| II段 | (57) | 33-31 | 10 | 27 | (18) |
| III段 | (52.5) | 24 | 6 | 28.5 | (14) |

なお、墳丘の特異な構造について2、3つづくわえておきたい。

まず、クビレ部におけるⅢ段の接続手法があげられる。すなわち、前方部墳頂面が後円部Ⅲ段斜面の下位に連接するのは通例であるが、そのクビレ部折角が前方部墳頂面よりも突出部さらに上方にのびることにある。後円部Ⅲ段の葺石上部は崩落しているため全体を確認しえなかつたが、折角は後円部墳頂に達していた可能性がつよい。つまり前方部墳頂面の接続したⅢ段斜面上位は、周囲よりも一段高い「突出部」をなす。この部分に葺石はみとめられず、いわば陸橋状の形状となる。こうした構造は、大阪府弁天山C1号墳、福岡県若八幡宮古墳などの調査例があるが、いずれも「突出部」には葺石がめぐる。

つぎに、後円部墳頂の構造がある。墳頂部は径12mほどの平坦面である。周囲に円筒埴輪列がめぐり、その内側に掌一頭大の花崗岩を敷きつめた石敷面を構成する。中央部は長さ3.5m、幅2.5m、深さ0.4mほどの既掘坑かと思われる凹み(後に横穴式石室天井崩落による陥没坑と判明)があり、その南端に墳丘中軸に直交する玄武岩板石頂部が露出する(この板石は横穴式石室の閉塞石)。立石から前方部に向って逆台形に敷石未設置部分がひろがり、前述の「突出部」に接続する。後述するように、敷石未設置部分は下部に營まれた横穴式石室の墓道にある。墳頂面へ前方部にいたる構造は、前代からの築造手法によりつつも新たな墓制に対応すべき形態を模索した結果ではないかと思われる。

後円部墳頂
の構造

いま一つは、後円部平面図形の構成である。墳頂面、Ⅲ段基部はほぼ正円形を描くのにたいして、I・II段基部の平面形は墳丘中軸線が短く、直交方向に長い橢円形をなす。その差異は、I・II段とも2mあまりである。たしかに、I段基部(裾)のレヴェルは、クビレ部と端部で2mほどの比高差がある。仮りに、その傾斜面に沿って正円形を描き、それを水平位に置換してもなお、平面の橢円形を解消するにはいたらない。墳丘平面図形構成企画の問題を含めて、今後の課題としたい。

後円部の
平面形

IV 墳輪と土師器

埴輪

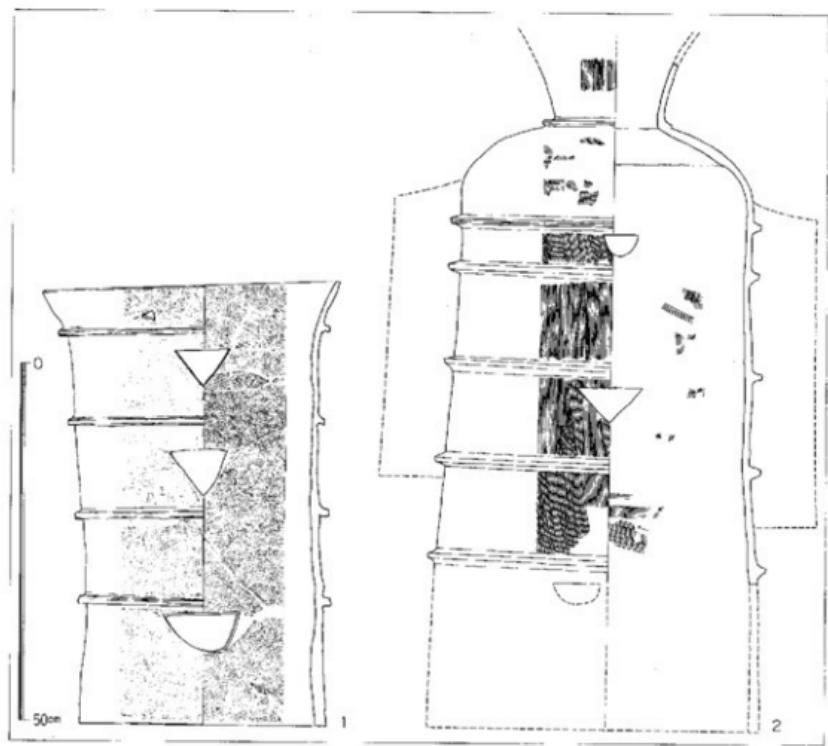
墳丘を囲繞する円筒埴輪列は、墳丘裾・Ⅰ段テラス・Ⅱ段テラス・墳頂面の4段に検出された。後円部墳頂面では敷石周圍にめぐるが、前方部に面する逆台形状の敷石木設置部には樹立されていない。円筒列の配列は遺存状況の良いクビレ部でみると、おむね1.5mに1本と比較的粗い。したがって埴輪の樹立は、一本単位の円形掘り方を穿ち、そのなかに凸帯第1段が地表に出る程度に埋めこむ手法である。円筒列のなかには朝顔形埴輪の樹立も破片の散乱から想定されるが、詳しい配列状況はわからない。円筒・朝顔形埴輪には縁付のものもある。Ⅱ・Ⅲ段テラスのクビレ部に各1本づつの縁付基部が検出されたが、そのいずれとも断定しえない。なお、前方部前端面櫛をめぐる円筒列の配列は注意される。すなわち、西半部のみの検出であるため全体の構成を知ることはできないが、墳丘中軸線から約4.8mのところで直角に外折し、その内側には円筒埴輪の樹立がみとめられない。この空間からは、後述する土師器群が出土し、ある種の葬送祭式の場として設定されたことをうかがわせる。形象埴輪は後円部墳頂から家・盾形、前方部墳頂から盾・鶴形が検出された。しかし前方部墳頂の中軸線上に検出された鶴基部と思われる橢円形埴輪を除いて配置を知りうるものはない。

復原された埴輪 出土埴輪の詳細は未整理のため本報告で記述するが、復原した2個体について概説しておきたい。右岡の円筒埴輪は3号埋葬施設に転用されたものである。底径34.8cm、口径41.8cm、器高62.8cm、凸帯は4段である。透孔は1段（基部）に逆半円、3・4段に逆三角形を対向する2個を配する。5段（口縁部）に穿れた小三角形透しの配置は明かでない。調整は外面がタテハケ1次調整のみ、内面はタテ・ナナメハケ一部スリケシである。縁付朝顔形埴輪は2号埋葬施設に転用されたもの。凸帯1段以下、口縁部、縁を打ち欠いている。透孔は1・5段が逆半円形、3段が逆三角形、対向する2個が穿たれる。最上段凸帯間の幅が他に比して著しく狭い。器高調整は外面タテハケ2次調整、内面はハケメを丁寧にスリケシている。なお出土したほとんどの埴輪外表に赤色顔料の塗布がみとめられる。すべて有黒斑の野焼き焼成である。

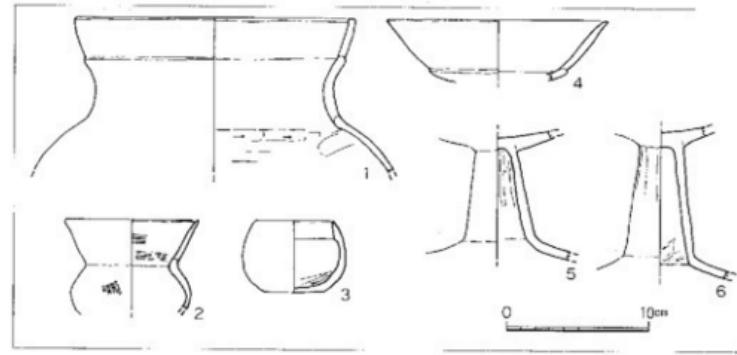
土師器

土師器は、上述した前方部裾のほか後円部墳頂、クビレ部から出土した。後円部墳頂・高杯1・クビレ部・高杯1・楕1・小型壹1・前方部裾・二重口縁壹1・中型壹1・小型丸底壹4・高杯8・脚付楕1・楕1である。いずれも細片であり復原が困難であるが、前方部裾出土の数点を図示しておきたい。

二重口縁壹（1）は球形の体部からゆるくカーブする頭部に接続し、弱い稜をなして内窓ぎみに立ちあがる口縁部に移行する。口端はヨコナデによって面をなす。体部内面はヘラ削り、外面はヨコナデ調整。小型丸底壹（2）は口径9.4cmをはかり、体部径をわずかにうわまわる。外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整、口縁部内面はハケメを残す。図示しない他の個体も、同様の器形・調整手法である。高杯（4～6）は器形全体を復原しうるものはない。杯部はわずかに内窓ぎみに外傾する。脚付楕部は下半に若干のふくらみをもつ傾向がある。透孔はない。器面調整は一部にヘラミガキがあるものの、ヨコナデが多い。楕（3）は小形であるが、いわゆる手捏とは異なる。内外面とも粗いナデ調整。



埴輪実測図 (1/8)



土師器実測図 (1/3)

V 埋葬施設

後円部中央の横穴式石室のほか、クビレ部から前方部墳丘上に3基の埴輪円筒棺と小石棺1基が検出された。小形の埋葬施設については、墳丘全面を調査したわけではないので、すべてを確認したもののない。

1号埋葬施設（横穴式石室）

後円部中央に位置し、前方部に開口する横穴式石室である（開口方向S40°W）。側壁上部が崩壊し、天井石が落下していたが、他はほとんど旧状をとどめている。

石室は、地山整形によって形成した頂部平坦面を掘削した掘り方のなかに構築されている。掘り方は幅8m、長さ8mの隅丸長方形のプランを呈し、深さ2.2mの断面逆台形の二段掘り込みである。その前方部側短辺中央に、一辺2mあまりの竪坑を穿つ。

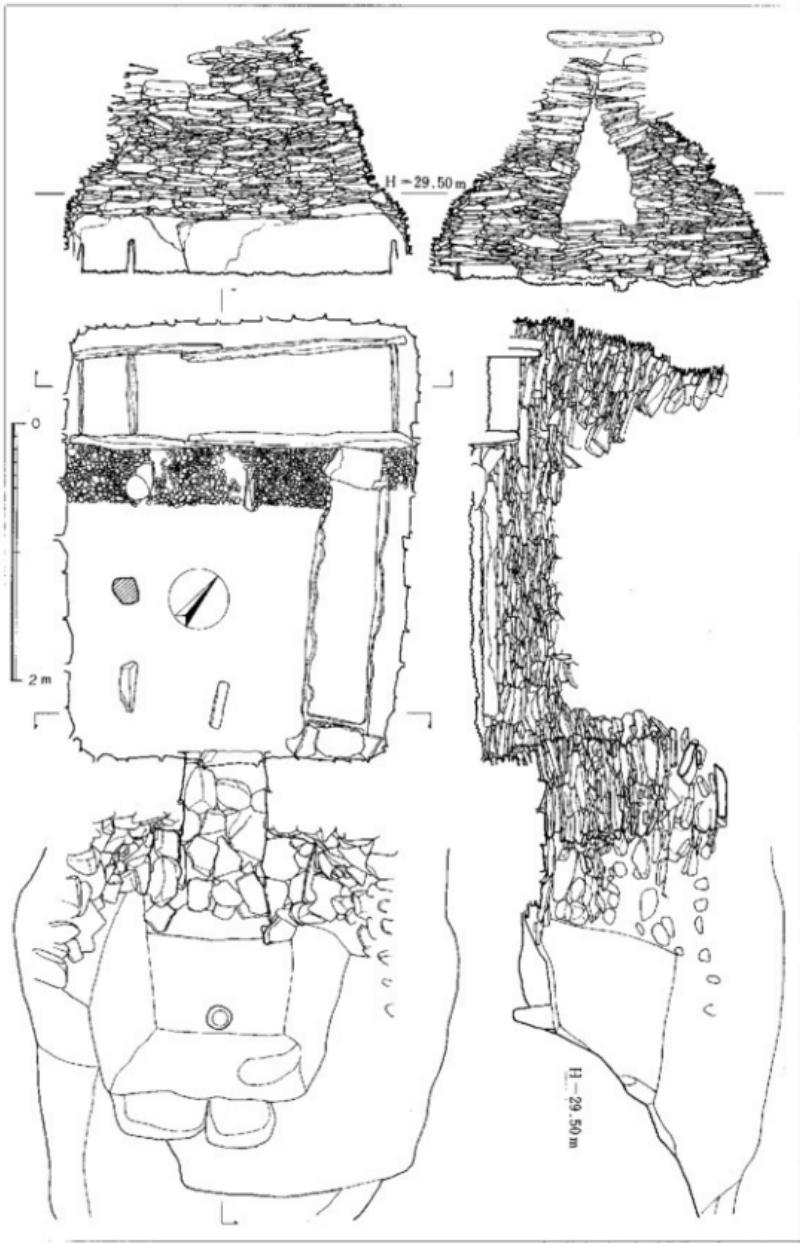
石室の構造は、矩形の玄室と前壁中央に接続する小規模の羨道からなり、羨道入口部に前庭と竪坑状墓道を付設する特異な形状をなす。石室周壁・天井石の石材は、積み石に使用された小転石を除いて玄武岩である。周壁控えの裏込めは、玄武岩削石・転石に一部花崗岩転石を混じえ、粘土を多量に使用している。なお壁面には赤色顔料を塗布する。

まず玄室は、奥幅2.7m、前幅2.5m、長さ3.4mの矩形プランを呈し、推定天井高約2mをはかる。割石小口積の周壁は、前・後壁がほぼ垂直に近く積みあげているのにたいして、左右側壁のばあい、床面より50cmほど上位から強く持ち送って積みあげ、天井部ではその幅40~50cmに狭まると想定される。その強度の持ち送りが、結果として壁体上部の崩落を招いたとみられるが、そのきざしは壁体構築時にすでに現われていたのであろうか、左側壁のほぼ中央部に柱状の支石をたてかけている。なお注意すべき構造として、周壁より内方に突出させた突起がみとめられる。奥壁に5個、左右側壁に各3個が現存するが、その配置からすると、本来は奥壁7個、左右側壁各4個の計15個が設けられていたと思われる。

石室と掘り方

(南から)





石室尖测图 (1/40)

玄室
(東から)



つぎに玄室にたいして小規模な羨道部は、前壁中央の、玄室床面より約50cmばかり高い羨道 壁体中に接続する。幅0.5m、長さ0.7m、天井石までの高さ1.4m、側壁は下部から斜め上方に直線的に持ち送り、天井部では10cmほどに軸を狭める。玄室側から合掌形に見えるのは、左側壁上部が内側に倒れ込んでいるためである。

羨道側壁は、入口部端から左右に0.6mづつ延長し、いま一度屈折して外傾する面をなす。周壁をみると、羨道正面壁が割石小口積を多用して整然とした構成であるのたいして、左前庭 右の側壁状石組は、硬くしまった青灰色粘土中に花崗岩転石が置かれた状態にちかい。左右側壁は、石室掘り方の下段面と羨道正面壁との空隙を充填する控えの裏込めの加飾面といえよう。この三方の壁面に囲まれた幅2m、長さ1mあまりの空間を、仮に前庭と呼ぶことにしよう。

前庭にとり付く墓道は、石室掘り方の前面中央を急角度に掘削した竪坑状をなす。掘り墓道 込みは下段掘り方から連続し、上位面は上段掘り方埋土、頂部平坦面盛土を行う過程で整形したものである。頂部平坦面からの深さは約2mある。床面は、掘削底面上に20~30cmのマサ土を充填し前庭床面に揃える。なお床面中央端に径20cm、深さ40cmほどのピットがある。柱痕跡を見いだすことはできなかったが、柱状物体の樹立に関連すると思われる。

後述するように、石室内には3体の遺体埋葬が想定される。その埋葬が同時でなく、順次追葬されたことは入口部閉塞にともなう種々の造作から知られる。石室実測図は、構築時の、換言すれば初葬時の入口部分をしめす。初葬時の閉塞は、羨道入口部を板石で覆ったとしても、前庭・墓道全体を埋め戻したか否か明かでない。第2回の埋葬時には、羨道・前庭床面を割石と粘土、墓道床面を粘質土で充填し、全体に30cmあまりの床上げを行う。この時の閉塞は、入口部を板石で閉いだのち、割石と粘土で板石前面を充填し、墓道全体を埋め戻している。第3回の埋葬（最終葬）のばあい、2回目の裏込めを斜め上方から掘削して板石まで掘り進んでいる。埋葬後は再び板石を立てて閉塞し、丁寧な割石の裏込めを行って埋め戻している。



前壁（北から）
(第1次面)



羨道部閉塞石
(第2・3次面)



墓道と羨道
(第1次面)



1号棺副室
四神镜(径11.8cm)



1号棺副室
珠文镜(径9.3cm)



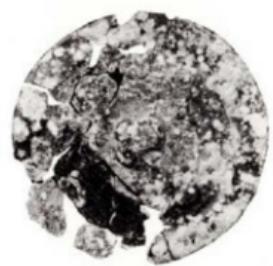
2号棺内
损文镜(径9.7cm)



2号棺外
轴载内行花纹镜(径14.8cm)



3号棺外
四神镜(径11.5cm)



3号棺床面
轴载位至三公镜(径11.8cm)

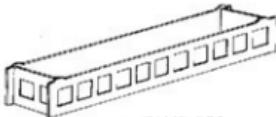
棺の配置と出土遺物

玄室床面（礎床）にそれぞれ素材を異にする3基の埋葬棺が検出された。奥壁に沿って副室を付設した箱形石棺（1号棺）、その前面狭道部寄りの右側壁に沿って埴質の棺（2号棺）、2号棺とのあいだに通路状空間をあけて玄室中央左寄りに箱形木棺を配置する。その手法は、肥後型石室にみる「コ」字形屍床配置に類似する。1号棺は玄室幅いっぱいの長さから、また2号棺は素材の脆弱性、狭道規模、前壁側小口部にみられる種々の造作からみて、石室構築時に配置されたと思われる。3号棺は木棺埋置のために礎床を一段掘り下げた溝からその存在を知りえたにすぎないが、両小口の四隅に置かれた人頭大の転石が礎床下に深く埋め込まれており、棺の位置は石室構築時にすでに設定されていたとみられる。

ところで棺蓋は、3号棺のはあい明らかでないが、1・2号棺では棺身に等しい素材のものは検出されていない。無蓋かそれとも有機質の素材を使用したかのいずれかである。

棺床は、3棺とも礎床のままである。1号棺のはあい、石室床面よりも棺内は20cmあまり高い。その上に2~3cmの厚さにベンガラを敷く。頭位は東向きであり、頭部の右側に若干の水銀朱らしき塊がみられた。2号棺の棺床も石室床面よりわずかに高く、その上に1~2cmの赤色顔料を敷く。頭位は北に向き若干の水銀朱がおかれる。3号棺では、床面は石室床に等しいかやや低い。赤色顔料は北向きの頭部周辺は厚いが、他はうすい。

各棺の詳細は本報告にゆずるとして、素材・形態とともに特異な2号棺について触れておきたい。2号棺の形態は、長側板の内側に小口板を挟みこんだ箱形木棺を忠実に模したものと思われる。底板はなく、いわば外枠のみであるが、長側・小口板一体造りである。胎土は埴丘を囲繞する埴輪と等しく、陶棺と呼ぶと後期の亀甲形陶棺を連想するため、埴（質）棺としたわけである。器壁が2~3cmと厚いため、焼成が充分にゆきとどいておらず全体に黒色をおびる。器表は赤色顔料が塗布される。棺の大きさは内法では長さ165cm、幅38cm、高さ30cmあまりである。なお長側板が小口板を挟む部位の上面に山形の突起が貼付される。また外面上には、器表を一段低くして表形した方形文を格子状に配列する装飾が加えられている。小口板には2個の配列がみられたが、長側板のはあい、その数は明かでない（模式図に表現した長側板の方形文様数は推測）。



2号棺模式図

遺物は石室上部、天井石の落下によって損傷を受けたものが多いが、ほとんど原位置を保つと考えられる。したがって、遺物の出土位置から、1~3号棺のいずれに伴う副葬品かを撰択することが可能である。その結果は下表にしめすとおりだが、一・三について確定しえないものがあり、今後の検討にゆだねたい。

出土遺物一覧

| | | |
|-----|-----------|--|
| 1号棺 | 棺内 | 剣1、鋼鉄2、鎌1、勾玉、管玉、ガラス玉、滑石製臼玉 |
| | 副室 突起上 | 四獸鏡、珠文鏡、直刀2、剣1、鉢1、薙手刀子2、針3、刀子、鉗、その他 素環頭大刀 |
| 2号棺 | 棺内 | 振文鏡 |
| | 棺外 | 素環頭大刀、直刀、鉢、鐵斧、刀子 |
| 3号棺 | 棺内 | 直刀、刀子、鉢 |
| | 棺外 | 四獸鏡、長方板革綱短甲、鐵斧、鎌 |
| 狭道部 | | 位至三公鏡（双頭龍文鏡） |



2号埋葬施設（埴輪棺）

前方部の後円部寄り墳頂面にある。墳丘中軸線より東に寄り、長軸を中軸線から斜めにとる。長辺 1.4m、短辺 0.9m の不整長方形の土壤に、口縁部・基部を打ち欠いた縁付朝顔形埴輪と、やはり両端を打ち欠いた円筒埴輪を組み合せて埋置する。棺としての大きさは、長さ 1.2m、幅 0.4m である。両小口は円筒を半截した破片で塞ぎ、さらに棺側面を打ち欠いた縁などで充填している。棺本体の上面に別個体の縁付埴輪を半截した破片で覆っている。副葬品はみとめられなかった。



3号埋葬施設（埴輪棺）

東クビレ部の墳丘裾に接して設けられている。棺の長軸は墳丘中軸線にほぼ平行する。棺は、長辺 1.2m、短辺 0.5m の浅い隅丸長方形の土壤に、円筒埴輪を転用して水平に埋置している。棺の小口、側面には、花崗岩転石、玄武岩割石を置き、棺の安定をはかる。なお、円筒埴輪の口縁部は北を向くが、両小口は他の埴輪片で充填している。棺に転用した埴輪はほぼ復原され、全体を知ることができる（IV章参照）。棺内からの副葬品等は検出されていない。



4号埋葬施設（埴輪棺）

東クビレ部から 10m ほどの前方部Ⅰ段テラスに位置する。円筒埴輪とⅡ段葺石とのあいだに、長軸を葺石と平行して設ける。その際Ⅱ段葺石基部の一部を除去している。土壤はほとんどみとめられない。棺ば口縁部、基部を打ち欠いた朝顔形埴輪を使用している。現状で長さ 90cm、幅 40cm あまりをはかり、口縁部は北に向く。北側小口は明かでないが、南側小口は埴輪片で塞ぎ、さらにその周囲に花崗岩転石を配置している。副葬品は検出されていない。



5号埋葬施設（小石棺）

前方部墳頂面にあり、2号埋葬施設のわずか 2m ほど南に位置する。墳丘中軸よりわずかに東に寄り、石棺長軸を合せている。土壤は長さ 1.5m、幅 1m、深さ 0.2m の不整楕円形で、鞠形埴輪の基部と想定される楕円形埴輪の掘方を切断している。棺は人頭大の花崗岩転石を使用し、一部に 2段目が残存する。棺内の平面形は楕円形で、小口壁をもたない。長さ 1.4m、幅 0.8m、深さ 0.3m をはかる。棺内からの副葬品は未検出である。

VI おわりに

鶴崎古墳は丘陵尾根端に築造された全長62mの前方後円墳である。調査の概要は既述したとおりであるが、知見のいくつかを要約し、今後の検討作業に備えることにしたい。

墳丘 前方・後円部ともに三段築成である。後円部墳頂にわずかな盛土を行うほかは地山削り出しによって造形されている。各段斜面は人頭一拳大の葺石をめぐらせる。墳丘プランは、後円部径に比してクビレ部が細く、かつ先端部がきほど間かない前期的様相をしめす。後円部墳頂は径12mあまりの平坦面をなし、周囲に円筒埴輪列がめぐり、その内側は拳大の転石を敷きつめている。円筒埴輪列は墳丘縁、I・II段ナラス、墳頂面縁の4段にめぐり、朝顔形埴輪の配置もみられる。埴輪は川西編年（川西宏行「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64巻2号、1978』）のⅡ期に属する。円筒・朝顔形埴輪のなかには猪付もある。これまで岡山県金蔵山が分布の西端であり、九州では初出である。猪付朝顔形埴輪のなかに、最上段凸帯間の幅が他の凸帯間よりも著しく狭いものがある。奈良原東大寺山、マエ塚古墳などに類例が知られる。また円筒埴輪では1種部が5~6cmと短く、かつ強く外傾するものがあり、金蔵山、大阪府羽佐山、大石塚古墳などに共通する手法がみられる。なお形象埴輪には家・盾・輪形がある。今後の検討を俟たねばならないとしても、形象埴輪を含む埴輪祭式を採用した古墳としては、九州でもっとも遡る可能性がつよい。

埋葬施設 墓室・小石棺を含めて5基の埋葬施設が検出された。とくに、後円部に築造された横穴式石室は形成期構造をしめす例として注目される。石室は地山を掘削した8×8mという大型土壤中に構築されている。玄武岩割石を小口積みに積みあげ、左右側壁を著く持ち送る。前方部側の壁面に狹小な羨道部を連接し、その前面に竪坑状の墓道を付設する。石室に入るには、まず墓道に下り羨道を通過してさらに一段低い玄室に降る。こうした入口部の構造は、北部九州初期横穴式石室に共通する手法であるが、留意すべきは狭小とはいえ羨道部を備えたことにある。同様な石室例は佐賀県横田下古墳をあげるにとどまるが、羨道が短く玄門状の構造に変化したものとして熊本県城二号・長崎県黄金山古墳などがある。5世紀の第2四半期には、割石小口積みにかわって大型の板石を立てて袖部を構成する手法が出現する。福岡県釜塚・狐塚古墳などがその初期の例である。たしかに、初期横穴式石室はそれ程強い個性をしめしアランダムな形成を予想せしめるがそれは定型化前の摸索段階における多様性といい換えられる様相であり、総体としては石室構造の系譜と推移を辿ることが可能である。詳細は別稿（柳沢一男「豊穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1981）に譲るが、鶴崎古墳石室は叙上の石室のなかではもっとも遡る構造であり、鶴崎→横田下→城二号・黄金山・（丸隈山）→釜塚・狐塚という推移が想定される。では、いま最古の横穴式石室として5世紀初頭を下らないとされている老司古墳3号石室との関係はどうであろうか。詳細については報告書の刊行を俟たねばならないが、老司3号石室は横穴式石室の影響下に成立した形式とはいえ、その構造を消化しておらず従来の豊穴式石室構築技法のなかで解釈し、相当なデフォルメを加えた特異な形態と私處する。したがって鶴崎古墳石室は、老司3号石室の延長上にあるとしても単なる技術的発展では理解しえないピアタスが存する。この間に羨道部連接という新たな技術導入が想定される。その祖形の追求は今後の課題であるが、漢域期百濟の基壇積石塚との関係も考慮されてよいであろう。北部九州における横穴式石室の受容は4世紀代に遡る可能性が強いのである。

埴輪の編年
的立場

初期横穴式
石室の変遷

老司古墳と
の関係

福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集

鋤崎古墳

1981~83年調査概報
1984年3月31日

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神1-7-23)

印刷 秀巧社印刷株式会社